

## 「新しいものと古いもの」

ルカの福音書 5:36~39

### はじめに

まず前回の箇所描かれていた出来事をおさらいしておきたいと思います。レビという取税人がイエシュアの召しに応え、何もかも捨てて従う弟子となるというものでした。そしてレビはイエシュアのために盛大な宴会を設け、そこに自分と同じ取税人や罪人たちをも同席させました。そしてこれは並行記事であるマルコ 2:18 も同様なのですが、この出来事に付随させて対比させるように、断食という行いについての議論が記されていました。つまり大いに飲み食いする宴会と、逆に一切の飲食を断つ断食についての記述とが並べて記されていたのです。「宴会」と「断食」この対照的な二つの事柄のその違いは、一般的な概念としてはそこに飲食物があってそれを口にするかしないかということになりますが、イエシュアはこれを以下のように説かれました。

「花婿と一緒にいるのに…断食させることが、あなたがたにできますか。」

「花婿が取り去られたら…断食します。」

つまり宴会と断食の違いとは、「花婿と一緒にいる」かいないか、であると述べられたのです。この花婿とはもちろん神の御子メシアである主イエシュアのことです。この御方が人々とともにおられる宴会、それはもちろん「神の国」を指し示しています。イエシュアが王の王、主の主としてこの地上に再臨され、世界を統べ治められる新しい世、新しい時代こそがまさにそれです。そしてその「神の国」を慕い求め、飢え渴いて待ち望むこと、それが断食なのです。これについてイザヤ書にこう預言されています。

イザヤ書【新改訳 2017】

58:6 わたしの好む断食とはこれではないか。悪の束縛を解き、くびきの縄目をほどこき、虐げられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか。

58:7 飢えた者にあなたのパンを分け与え、家のない貧しい人々を家に入れ、裸の人を見てこれに着せ、あなたの肉親を顧みることではないか。

58:8 そのとき、あなたの光が暁のように輝き出て、あなたの回復は速やかに起こる。あなたの義はあなたの前を進み、【主】の栄光があなたのしんがりとなる。

58:9 そのとき、あなたが呼ぶと【主】は答え、あなたが叫び求めると、『わたしはここにいる』と主は言う。もし、あなたの間から、くびきを除き去り、虐げの指をさすことや、邪悪なことばを取り去り、

58:10 飢えた者に心を配り、苦しむ者の願いを満たすなら、あなたの光は闇の中に輝き上り、あなたの暗間は真昼のようになる。

58:11 【主】は絶えずあなたを導いて、焼けつく土地でも食欲を満たし、骨を強くする。あなたは、潤された園のように、水の涸れない水源のようになる。

58:12 あなたのうちのある者は、昔の廃墟を建て直し、あなたは代々にわたる礎を築き直し、『破れを繕う者、通りを住めるように回復する者』と呼ばれる。

この預言は神である主の「**好む断食とは**」という御言葉に始まり、それは解放、癒し、再建などの出来事にたとえられた、主によって「**回復**」されることにあると語られています。この「**回復**」を受けるために絶対に必要なこと、それはまず奴隷になり、病気になり、破壊されることなのです。まさに「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人です。」とあるとおりで、私たちの主の御業が表される、主が来られるためには、「主よ、私にはあなたが必要です！」と呼び求める者、主の御名を呼び、その解放、癒し、回復の御業を求める者が必要なのです。それが、それこそが主の「**好む断食**」なのです。今あなたは飢え渴いていますか？ 様々なものに捕らわれ、抑圧され、苦しんでいますか？ 自分の弱さや足りなさ、愚かさに悩んでいますか？ 心や身体に痛みや病を抱えていますか？ もしそうなら、あなたには「神の国」が、イエシュアが来られることが、そしてこの御方とともに住み、ともに歩み、ともに生きることが必要です。この「神の国」にこそ、その必要を満たすすべてがあります。このように、宴会と断食という、対照的な二つの事柄には「神の国」とそれを求める「飢え渴き」という意味があるのです。この事実、文脈に秘められた意味を踏まえながら、つまり「神の国」を求めながら、主の御名を呼び求めながら、その続きとなる今日の内容に入ってまいりましょう。

## 1. たとえ

ルカの福音書【新改訳 2017】

5:36 イエスはまた一つのたとえを彼らに話された。「だれも、新しい衣から布切れを引き裂いて、古い衣に継ぎを当てたりはしません。そんなことをすれば、その新しい衣を裂くことになり、新しい衣から取った布切れも古い衣には合いません。

5:37 まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れたりはしません。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は皮袋を裂き、ぶどう酒が流れ出て、皮袋もだめになります。

今日の内容はすべてイエシュアの「**たとえ**」話となっています。イエシュアはこのように様々なたとえを用いて語られましたが、それは物事を解りやすく説明するためではありません。ヘブル語でこれをマーシャル(מַרְשָׁל)と言い、本来は「神が定められた時のしるし」を指し示すためのものであったのです。

創世記【新改訳 2017】

1:14 神は仰せられた。「光る物が天の大空にあれ。昼と夜を分けよ。定められた時々のため、日と年のためのしるしとなれ。

1:15 また天の大空で光る物となり、地の上を照らすようになれ。」すると、そのようになった。

1:16 神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼を**治めさせ**、小さいほうの光る物には夜を**治めさせた**。また星も造られた。

これは神の天地創造の御業の第四日目の出来事として記されているものですが、ここで「**治めさせ**」と訳されているのが聖書で最初のマーシャルです（ここでは名詞形のマーシャル **מַרְשָׁל** として用いられています）。そしてそれは神が「定められた時々のため、日と年のためのしるし」を表すものであることが明示されています。しかしそれは一般的な時間の制約、制限という昼と夜や季節の移り変わりを指すのではなく、神のご計画が成就、実現するその時、その日を指し示す、表すものであるということです。つまり

神がお定めになったその時、その日に何が起こるのかというご計画を表したもので、それがマーシャル「たとえ」であるということです。

そして前回の「宴会と断食」が、ここでは「新しい物と古い物」というような形でたとえられています。このように「宴会と断食」が対照的な真逆の事柄であったように、「新しい衣」と「古い衣」もまた合わない、混ざらない、交わらないもの同士であり、さらに「新しいぶどう酒」と「古い皮袋」という組み合わせもまた同様であることが述べられています。それはつまり「神の国」に住み、主イエシュアとともに喜びと楽しみ、祝福に満たされて生きるその時、その日、その時代と、「神の国」に飢え渴き、慕いあえぎ、主の御名を呼び求める時とは、決して交わることのない、異なる時に起こるものであるということです。私たちが「神の国」に入り、そこに生きるならば、もはやそこには飢えも渴きも痛みも悩みも、死も滅びもありません。そこにイエシュアがともにおられるからです。しかし「神の国」を求めながらも、今のこの世に生きる、今の私たちに悲しみや苦しみ、痛みや悩みはつきまといまいます。それは当然のことながら、私たちは今はまだ「神の国」に入っておらず、それを求め、待ち望むという状態にあるからです。しかし逆に悲しみや苦しみがあるからこそ、私たちは「神の国」のその到来を、その日を待ち望む、求めることができるのです。よく「神がいるならなぜこんな悲しいことが起こるのか」という声を聞きますが、それは今の世を憂い、今のこの世が終わり、「神の国」が来ることを求めさせるためなのです。

今日もそうですが、イエシュアがおられた時代にも、ただその日その時食べるパンだけを求めて、あるいはその時患っていた病が癒されることだけを求めて、大勢の群衆がイエシュアに群がって来ました。私たちはどうでしょう。目の前の暮らしの快適さだけを、ただ求めてはいないでしょうか。またその飢え渴き、願いや目的が「神の国」ではなく、今のこの世におけるものになっていないでしょうか。私たち教会はよくその願いや目的を信仰という言葉に置き換えて、これを多用しますが、信仰とは、信仰者とはこのような者のことを指すのです。

#### ヘブル人への手紙【新改訳 2017】

11:13 これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。

11:16 しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。

11:24 信仰によって、モーセは成人したときに、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、

11:25 はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。

このように、信仰とは「神が彼らのために都を用意された」すなわち「神の国」を「はるか遠くにそれを見て喜び迎え」、「神の民とともに苦しむことを選び取り」ながら、今のこの地上を「旅人であり、寄留者」として生きることを指すのです。ですから今のこの時代、この世に希望はありません。やがて来られるイエシュアとその御国にのみ、それはあるのです。つまり私たちが求めるべきものは、今のこの世にはないということです。

#### エレミヤ書【新改訳 2017】

6:13 なぜなら、身分の低い者から高い者まで、みな利得を貪り、預言者から祭司に至るまで、みな偽りを行っているからだ。

6:14 彼らはわたしの民の傷をいいかげんに癒やし、平安がないのに、『平安だ、平安だ』と言っている。

6:15 彼らは忌み嫌うべきことをして、恥を見たか。全く恥じもせず、辱めが何であるかも知らない。だから彼らは、倒れる者の中に倒れ、自分の刑罰の時に、よろめき倒れる。——【主】は言われる。」

今日、私たち教会はこの預言にあるような、いいかげんな癒しを行い、偽りの平安を語ってはいないでしょうか。主はこれを「忌み嫌うべきこと」と言われ、しかし私たちはそれを正しいことと考え、「全く恥じもせず」にいるということ、覚えなければなりません。

## 2. つながり

5:38 新しいぶどう酒は、新しい皮袋に入れなければなりません。

5:39 まただれも、古いぶどう酒を飲んでから、新しい物を望みはしません。『古い物が良い』と言います。」

このように「神の国」と、私たちに悲しみや苦しみをもたらす今の世とは決して交わりません。それは完全に区別されているのです。考えてみてください。もし今、あなたが喜びと楽しみと平安に満たされていたら、あなたは決して「神の国」を求めることをしないでしょ。そしてもし「神の国」にも、今のような悲しみや苦しみがあるとしたら、やはり求めないでしょう。このように「新しい物と古い物」とは、決して相容れないものなのです。

しかし注意して聞いていただきたいことは、この「新しい物と古い物」にたとえられた、異なる二つの事柄は、混ざり合っ一つになることも、何かを分け合ったり、同じものを共有することはありませんが、お互いを保った上で一対となり、つながって存在すべきものなのです。なぜなら「新しい物」にたとえられた「神の国」のその到来は、「古い物」にたとえられたその「神の国」を求める者、待ち望む者にこそ与えられるものだからです。私たちは今の世に悲しみ、苦しむことによって、そのようなものの一切ない「神の国」に憧れ、これを求め、待ち望み、主はその求めに応え、私たちにその御国を受け継がせてくださるからです。まさにこう言われているとおりです。

マタイの福音書【新改訳 2017】

6:31 ですから、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って、心配しなくてよいのです。

6:32 これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです。あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

6:33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

6:34 ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります。

このように、私たちは「その日その日に十分に」与えられている「苦労」を受けながら、「まず神の国と神の義を求めなさい」と命じられているのです。またこうも記されています。またこの世の終わり新しい

世について数多くの啓示を受け、神のご計画を知らされた使徒ヨハネは、教会に向けての手紙の冒頭で自身について表現しています。

#### ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

1:9 私ヨハネは、あなたがたの兄弟で、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者であり、神のことばとイエスの証しのゆえに、パトモスという島にいた。

このように「苦難と御国」という異なる時、神がお定めになった異なる日がつながり、決して切れることのないペアリング、カップリングとして私たちには与えられているのです。ですから今のこの世に生きる私たちがなすべきこと、それはいいかげんに癒されること、偽りの平安、はかない罪の楽しみにふけることではなく、「御国」を「はるか遠くにそれを見て喜び迎え」、今の「苦難」の中で「忍耐」することなのです。

#### ヤコブの手紙【新改訳 2017】

1:12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いた人は、神を愛する者たちに約束された、いのちの冠を受けらるからです。

私は自分の生涯が、そしてこの教会が「試練に耐える…幸いです」なものとなることを求め、信じます。どうかこの御言葉どおりに、この身になりますように。

### 3. はるかに大きな違い

私は昔、詩篇 103:2「主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな」という御言葉から、神の恵みを数えるように勧められ、その日あった嬉しかったこと、楽しかったことを数え、感謝の祈りをしていました。しかし今日、私は、あえてこうお勧めします。悲しいこと、苦しいこと、悩んでいることを数え、覚えてください、と。そのあなたが数え上げた数々のものが一つも存在しない、決して味わえない世界を、御国を、主は用意しておられます。「神の国」とはそのようなものです。しかし同様に「神の国」には、あなたが今まで味わったような嬉しかったこと、楽しかったこともまた存在しません。なぜならそのようなものとは比較にならないほどの、私たちがこの世では決して味わうことのなかった、この世のものはるかに超越した、優れた恵み、祝福のみが存在する世界、それが「神の国」だからです。栄華を極めたソロモンとその王国を、野の草花にも劣ると言われたイエシュア、その御方がお建てになる御国が一体どれほどのものか、正直言って想像もつきません。どうか「神の国」で私たちが目にする、受けるその「主が良くしてくださること」を見くびらないで、侮らないで、ばかにしないでいたただきたいです。それほどまでに今日この箇所でイエシュアが提示しておられる「新しい物と古い物」にたとえられた「神の国」と今のこの世の間には、あらゆる面において一切相容れることのない、全く共有、共通するものがないほどのはるかに大きな違いが、月とすっぽん、雲泥の差以上の格の違いあるのだということを、今日どうか知ってください。そしてさらにこの御国をともに待ち望んでまいりましょう。